volume 156

変わる日本の「暮らし」と「まち」

防災イベントを通じて地域の連携と絆を強める

東京都墨田区　立花一丁目団地
防災×ASOBI FES
2025年●令和7年〜

阿部民子　text by Tamiko Abe
illustration by Shigeyuki Sakata

快晴に恵まれた1月31日。墨田区の立花一丁目団地にあるグラウンドは、親子連れから高齢者まで多くの人でにぎわっていた。当日開かれていたのは、昨年に続いて2回目となる「防災×ASOBI FES」。誰でも無料で参加できるイベント会場では、楽しく遊びながら防災の知識が身につくヒントがいっぱい。消火器訓練や防災講座など真面目なブースもあれば、カラー粘土で疑似〝うんち〟をつくり、防災トイレで流してみる体験は子どもたちで大行列。ひときわにぎやかな歓声があがっていたのは、VR防災体験車だ。VRゴーグルをかけて体験車に乗ると、地震や台風、火事の疑似体験ができるというもので、「お皿が飛んできた！」「ほんとの地震みたい」と子どもたちは大興奮。お昼には、防災用のかまどベンチでつくった豚汁やおにぎりに長い行列ができ、200食があっという間になくなるほどの大盛況だった。

団地を地域の集いの場に

イベント会場となった立花一丁目団地は、東武亀戸線の「東あずま駅」を降り、東京スカイツリーを間近に見ながら歩いて3〜7分。都心へのアクセス抜群、総戸数は1500戸にのぼる。

「子育て世代をはじめ、シニアや外国人など、多世代、多文化共生の縮図のような団地です。敷地内には今回のイベントが開かれたグラウンドやボール遊びができる広場などがあり、小学校や児童館が隣接していることもあって、団地内外からの子どもが集まる環境でもあります」と話すのは、URエリア計画課の加藤綾子だ。

2022年からは、多世代・多文化交流を目指し、URと立花児童館、青少年対象の体験活動に取り組む一般社団法人SSKが連携。毎月1回、ベーゴマなどの昔遊び、ボードゲームや立体迷路などの遊具を並べて、移動式あそび場「みちあそび」を開催。同時に地域食堂「こだち」がお弁当を提供し、地域住民の憩いの場となるとともに、地域の連携を深めてきた。

毎月の活動を重ねるなかで話題にのぼったのが、団地グラウンドにある「かまどベンチ」だ。一見すると木の板が乗った普通のベンチだが、板を取るとかまどに変身。非常時には、薪をくべて炊き出しをしたり暖をとれるというもので、URの管理する団地や防災公園などではおなじみの防災アイテムだ。

「防災は、UR全体で力を入れて取り組んでいるテーマ。この団地では多くの子どもが遊んでいますが、ベンチがかまどになることも知らないし、使い方もわからない。それなら、防災がらみのイベントを開いて、かまどベンチで豚汁をつくり、災害時に役立つと知ってもらえたら」と、URは児童館、SSKとともに防災イベントを企画。昨年の「防災×ASOBI FES」開催につながったという。

上／VRゴーグルを着用して体験する揺れはかなり実際に近い。右／かまどベンチを使って、豚汁をつくる準備をするスタッフと子どもたち

地域のつながりを防災の力に

このイベントの大きな特徴は、子どもたちも主役として大活躍することだ。豚汁づくりでは、民生委員やSSKのボランティアとともに、具材を切ったり、お客さんに配膳したり。子どもたちを見守っていた、地域食堂こだちの本橋章子さんは「地域に住む高齢の方やお兄さん、お姉さんに調理の仕方を教えてもらったり、ほめてもらったりするのが子どもたちはすごくうれしいみたいです。また、イベントを通して私たちの活動をより広く知ってもらうことができ、支援が必要な一人親や困窮世代へアプローチすることができました」と成果を語る。

「大盛況のイベントになったのは、豚汁をつくってみんなでおいしく食べよう！という遊びがベースだったから。これがきっかけでグラウンドのベンチがいざというときに役立つと知ってもらうとともに、顔見知りが増えて、地域の絆の強化につながれば」と話すのは、SSKの秋山司さんだ。

立花児童館館長の蔵野知子さんは「子どもは家庭だけでなく、児童館や学校など地域全体で育つもの。有事の際にも、子どもたちが助けてもらうだけでなく、助ける側にもなれる関係性ができて、とても有意義なイベントだと思っています」と話す。

「立花一丁目団地自治会や向島消防署、墨田区の防災課、墨田区防災士ネットワーク協議会、すみだ多文化共生交流会、日本NPOセンターなど多くの方にご協力いただき、新たなつながりも増えました。有事の際には、普段からのこうしたつながりがとても大切。イベントを機会に、多世代・多文化が共生できるゆるやかなつながりをつくっていきたい」

とURの加藤。

誰もが楽しく参加しながら防災について考えることができるイベントは、地域の安全と絆づくりに大きな役割を果たしているようだ。

社会課題を、超えていく。
UR　UR都市機構

［企画制作］新潮社